随想　　生かして　かえして　いただいて

日本工業技術教育学会

会長　小　林　一　也

1　ラッキー・セブン

看護師さんとこんな会話をしました。

看「小林さんは、今年(2005年)おいくつになられますか」

小「9月で77歳になります」

看「ほんとうですか。それはよかった。ラッキー・セブンですね」

手術後で苦しんでいる私に、その看護師さんは、やさしいラッキー・セブンという声を投げかけてくださった。

小「2005年、77歳、佳い年になるだろうと思っていたのに、1年間入退院を続け、どうしたのだろうと、なげいているのですよ」

しばらく考えていた看護師さんから、こんな言葉がかえってきた。

看「そんなふうに考えないほうがよいですよ。毎日患者さんをみていると、小林さんよりずっと苦しんでいる人が多いですよ。77歳、ラッキー・セブンだから、元気になれそうだと思って、元気を出されたら、どうですか。」

このときの看護師さんの言葉から、人間の心の正解を感じることができた。笑顔の20代の女性が、神様に近く輝いても見えた。77歳、幸運がきてもよさそうなのに発病・入院、「ついてないなあ」と思っていたのに、看護婦さんは「77歳だから助かったんでしょ」とおっしゃる。欲深い私への警告と思い、この激励をうれしくいただくことにした。

2005年1月16日(日)午後10時、お風呂に入りタバコに火をつけ「サンデースポーツ」を見ようとした途端、背中全体が痛くなり、娘が車で近くの病院に直行し、緊急入院することになった。血圧が 200、動脈りゅう(こぶ)から血液がにじんでいる痛みとわかった。動脈りゅうが破裂まではいかず、「かいり」して血液がにじんでとまって助かったのである。この発病の原因は老化現象と考えてよいと思うのですが、ここまできたのは、次のような私の健康への過信があったと言えましょう。

① 若い頃から血圧は低目で、ここ十数年人間ドックも検診も1度も受けていなかった。

② 年齢が80歳に近くなっているのに、一日タバコ三箱を吸い続けた。

こんな無謀ともいえる日常生活に当然天罰が押し寄せたものと考えています。

タバコは、若い医師から「あなたがこれからもタバコを続けるようでしたら、私は医師としての手を引きます」と言われ、1月16日からタバコを完全に止めました。

このようにな医師や看護師のみなさんの善意に助けら、あれから一年以上余生を生きていることができています。

2　手術

2005年1月16日から20日ばかり入院しましたが、手術はしませんでした。これには2つの考え方があったからです。

① 「りゅう」(こぶ)をとり、人工血管を入れた方がよい。

② 年齢的に人工血管を入れても成功するかどうかわからない。血圧を下げるなどして長持ちさせるほうがよい。

このような2つの考えが医師団の中に並行し、通院・検査を1年間くり返し、手術にふみ切れ

たのは暮の12月16日でした。ここまでこぎつけたのは、一人の若い先生が「小林さんの血色がとてもよい。手術の善し悪しは年齢で判断はできない。手術は多分成功するでしょう」という主張が通ったことによります。

2005年12月12日に入院、16日に手術となりました。12日の朝、私の娘が私に一枚のハンカチを渡してくれました。そのハンカチには一匹のグリーンの「蛙」が画かれていました。娘は「ジィちゃん、帰ってくるんだよ」と言いました。私は小さく「ありがとう」と言いました。

数日前には、練馬の叔母(90歳渡辺哲子)から手紙を書くのはたいへんだったでしょうに、綿々と手術に向かう心構えをいただきました。

「手術前には叔父の肺結核手術を思い浮かべてください」

叔父・叔母は終戦後朝鮮から三人の幼な子と引き上げ、その後叔父の肺結核手術は大成功したのです。「あの頃の手術に比べ、手術も簡単になり、医療もとてもよくなっていますから心配なく」ということでした。

75年前の筆者と今90歳の叔母渡辺哲子(県立柏崎高等女学校)

12月16日朝9時、私は全身麻酔をかけられ、夕方「終りました」と言われるまでの経過は全くわかりません。それにしても16日8時間の手術の間、待ち続けてくれた家内と娘の心の動きはどんなものであったろうと気になりました。「よかった、よかった」と言ったきり言葉になりませんでした。長男もかけつけ、手術の成功を喜んでくれていました。

私の手術は、二ヶ所の「りゅう」をとり、それぞれ人工血管を入れれるというものですから、それほど難しいものではないともいえましょう。後で聞くところによれば、「りゅう」はレバーのようになり、ゆ着しそうなところもあったそうです。手術そのものよりも回りの臓器との具合がたいへん心配な手術だったのでしょう。

多くの医師団、点滴の薬剤師、看護師のチームワークには頭が下がるばかりです。

他の患者さんの話を聞きますと、私位の年齢になりますと、一つの病気でなく併進している病気の治療が多いようです。私は血管の手術でしたが、心臓と血管、脳と血管などがとても多いように感じました。これは、老化の普通の現象でしょうから、可能な限りいつも医師の診断を欠かさないこと、そのときの注意を実行に移すことなどが大切になりましょう。私も手術後やるべきことの半分ぐらいしかできませんが、これからも続けてがんばろうと思っています。

3　驚きと医療技術

手術後の一週間ほどがたいへんでしたが、回りの人々の善意により、その峠を乗り越えることができました。

(1)　妹の見舞い

私は長男ですから、当然実家にとどまり両親の面倒を見なければならなかったのですが、格別高い志があったわけではありませんが、未知の首都の匂いを感じてみたく家を捨て上京しました。一番困ったのは両親であったでしょうし、一人の妹も困り果てたことでしょう。妹はそんな兄にこりもせず、ずっと親しく付き合ってくれ、立派に両親をみてくれました。そして郷里で元気でいてくれる妹を、私はとても誇りに思っています。その妹が手術を聞き及んで見舞いに行くと言ってきました。驚きました。暮れも押し迫った12月20日、大吹雪の新潟・柏崎から上京しょうというのです。びっくりして「よいから」と止めました。妹と主人と長男は休暇もとり関越道をとばすというのです。そして、午後3時頃練馬の従弟の朝夫さんもご一緒に来院「よかった、よ

かった」と喜んでくれ、田舎の話を楽しくして別れました。次の日、妹に電話をすると、「吹雪がすごく、長岡近くになると一寸先が見えず、車の運転もままならず、この辺に降りて泊まり明朝帰ろうといいながら、そのままやっと家につきました」とのことでした。

こんなみなさんとの心の結びつきが、私を「生かして　かえして」くださったのだと感謝しています。こんな時、回りの人々のほんのちょっとしたお気持ちでも、とても大きな勇気になるものですね。妹の暮・大雪の中での行動は、気づきの遅い兄私にも最近にない格別なものでありました。

(2)　高度医療技術

手術後一週間の診療は、私には昔の医療と今のそれとの違いを余すところなく教えてくれたように思います。手づくりの医療技術と管(点滴)に囲まれた医療、突出した名医の医療ではなくチームワークによる医療の違いを思い知らされました。医療技術も製造技術も、その高度化というのは、このような変化を指すのだろうと考えました。そして、その高度化の中核には人間の志、志同士のコミュニケーションが厳然として横たわっているとも考えました。

術後の夜をみる医師、医師を取り巻く看護師の方々の頭の良さ、動きの滑らかさ、気遣いの細やかさは驚くばかりでした

ほとんど寝返りも打てない患者、あまりお願いをしてはいけないとじっとこらえているかもしれない患者の心をどこまで読んで動けるか、この辺になると人間の気配りによる動きというより、あたかも救世主のようなとっさの動きになるのでしょうか。「そこまで気をつかってくださるのか」と感謝せずにはおれないことを一再ならず経験することになりました。医師・看護師さんを患者として評価しょうなどという思いあがったことをする気持ちは全くありませんが、感謝の気持ちがどんな時に最も強くなるのかを考えておくことは、どんな仕事をする場合でも大切なことではないかと思い、いろいろと考えてみました。

「あの患者さんは言葉に出しては言わないが、こんなことをしてほしいのではないか。ちょっとやって差し上げようか」というような、ささやかな行動・判断がとても大切なのです。これこそ、その人の人間性といえるのでしょう。

この人間性は、持って生まれる場合や幼い頃の環境に左右されることが多いといえましょうが、後生においては何かに出会った時の心構えの積み重ねによって培われるものではないでしょうか。

私は手術後、とても良い医師・看護師さん方に囲まれ、今感謝の気持にいっぱいになっているのは、思い通りに動けない患者の前で、この医師・看護師のみなさんは動く体験のくり返しを通じ人間として尊い動きをより多くし、患者を喜びに近づけておられる。そのくり返しにより今の人間としての成長の姿があり、私はそれを受けているのだと考えました。

4　雪国と工業教育

人間は、幼い頃育った自然環境を体に組み込み、その後、世の中にでてからの「はたらき」という社会環境から学び、両環境を一体化していく動物のようである。

トンネル(三国峠・清水トンネル)を越えると、雪国(湯沢)だった。

設計(図面・測定)を乗り越えると、加工(製造)であった。

(1)　生涯現役

60歳を過ぎた頃から、こんなことを知人からよく言われました。

「いい加減に、工業教育から手を引いたら」

「もう、会長はいいじゃないの」

数十人の会合で友人から忠告を受けたこともあるし、酒席で知人から静かに言われたこともあ

る。また、家内が電話に出て、私のことを会長さんと言っている友人の声から「もう、会長さんなどは他人にゆずったらどうなの」という忠告も受けました。

私は若い頃からなんとなく「仕事を趣味にすることはできないか。そうすれば楽しい人生になるにちがいない」と思って生きてきました。つまり、工業教育を趣味にして生きようというのです。ですから、私の工業教育の主張は時に弱く、公私の別がはっきりしないことが多かったように思っています。

いろいろな忠告はとてもうれしく受けてはいたのですが、今でも「体の続くかぎり工業教育を楽しませてください」という気持ちは変わりません。何人かの後輩のみなさんが動きにくいということはありましょうが、私などそんなに大きな影響力のある存在ではありませんから、一瞬目をつむって私と同道してくださいませんかと申し上げたいのです。私から工業教育をとったら、あと何も残りませんから、体が動かなくなるまで仲間に入れてあげてください。若い頃ほど悪いことはいたしませんし、過去は深く反省しているのですから、ぜひともお仲間にと願っています。

(2) 雪国の生活と工業教育

今年はね日本海側は大雪でかなりの自然災害に悩まされています。私が幼い頃は毎年今年のような大雪で、二階の窓が玄関になるような冬をみんな経験しました。そして春が近づき積もる雪と地面の間に、とけてすき間ができ、そのすき間と地面の間に草の芽が現れる春をひたすら待ったものです。この「耐久」は雪国の普通の姿でありました。半年「こらえて生きる」のです。

どうです。こらえて生きる、これは工業(ものづくりの人生)と似ていませんか。スキー競技のモーグルもジャンプもハーフ・・・もみんな見ごたえはありますが、スキー距離の耐久レース、クロスカントリーが、とても工業教育に似ているように思えてなりません。どちらも「死んでしまいそうな苦しい時間」が横たわっているからです。今、日本では、この「死んでしまいそうなことがあるもの」を好まなくなっていますが、こんな苦しむところに人間の本質(愛)はひそんでいるように思えてなりません。日本の報道陣はそんなところを忘れていると思いませんか。工業教育がすたれる大きな一因でしょう。女子ゴルフはどうでしょうか。偉大な賞金王の報道が忘れがちではないですか。スキー女子モーグルではどうですか。金メダリストの報道は少なく、カッコよい若手のみがテレビ画面におどることがあまりにも多いではありませんか。ほんものの人間の姿を忘れかけている日本人としか言いようがありません。小泉さん「これこそ改革」というのであれば、雪国の人々はだまってはおりませんよ。

私が工業教育にとりつかれたのは、指導主事という仕事についてからでした。1967年(昭和43年)のことでした。議会や報道に高校の資料を渡すことが大きな仕事になりました。その仕事の十数年の結果「これは専門高校(特に私の担当工業)に全力を傾注しなければならない」と考えました。普通、資料は普通科と専門学科に分けて集計されますが、その差はおまりにも大きかったからです。正に学校は格差社会、どうしても弱い方を助けなければならないと思いました。学力はもちろんですが、発生事故件数など驚くほどの差がありました。

「弱いものに手を差しのべず、強者にだけよりそうのはなぜだろう」

これが私を工業教育のとりこにした原点でした。あれから40年、気持は全く変わっていません。

私は下関から歩いて関門トンネルを渡り門司に着き、工事の殉職者の碑(28人)に教え子の名前を見つけ、拝んで参りました。

原発やJRの事故がある度に「教え子が何人・・・・」と思わずにはいられません。これをどうしたらよいのでしょうか。

だから、元気の間は私を工業教育の仲間にいれ続けてあげてください。できるだけ気をつけて、一隅を照すという行動に終始しますから。